早春の緑飼に適する レープ（菜種）の栽培について

長い冬から覚めて、いよいよ春を迎えんとするころは、家畜にとつても最も旺盛な生長を開始する時なので、この時期に家畜の必要とする栄養を十分に給飼摂取せしめることは不可欠のことである。しかし早春は冬季間の飼料である根菜、埋草。乾草等も逐次枯渇してくる時なので、早春の青刈飼料の自給体制の確立は有畜農業経営上、極めて重要であつて、本誌八月号にて禾本科及ひ荳科のものについて述べたが、今回は十字科作物であるレープについて述べることとする。

レープ（菜種）

特性 レープは一年生又は越年性で、特に秋播菜種は早春の緑飼として利用され、その利用期間は殆どライ麦と同様であるが、早春の萠芽は多少早いので、幾分早目に利用することができる。収量はライ麦より幾分劣る。

品種 青刈用レープとして用いられる品種は主として稚苗時匍匐型で、葉幅広く、茎に紫色を帯ひたものが選ばれているが、最近は更に飼料専用の合成菜種も育成されている。

◎ハンブルグ一号　いわゆる洋種菜種の代表的品種であつて、秋播晩生種で耐寒性強く、北海道を始め各地の栽培に適している。草丈は五尺余となり、収量多く品質また良好である。

◎COOIO　宇都宮大学において育成された飼料型の合成菜種で、開花はハンブルグに比して約十日早く、葉は極めて大きく、初期生育が早く、青刈多収の優良品である。ただし湿地では生育が十分でない。

栽培 レープはライ麦同様吸肥性が大であるから、なるべく連作を避け、四～七年の輪作とした方がよい。やや湿気を好むので水田裏作にも適している。追肥の効果は顕著であるから、とくに窒素肥料は元肥と追肥と半々程度に分施した方がよい。

利用 収穫は、開花揃いから結莢期に入ると著しく茎が硬化するので、抽薹期から始め、開花初期までの約三週間ぐらいで終るようにした方が、採食率もよく、利用上有利である。

なおレープの緑飼は牛乳に一種の臭味をつけるから、搾乳後に給与すること、また青刈レープを給与した家畜は食後一般に平素より多くの塩分を欲するとされている。

つぎに各地の播種期、利用期並びに品種の特性及び栽培について表示することとする。

（みうら）

第一表　播種並びに利用

区分	播種期	利用期間
寒冷地	九月上旬	五月上旬～六月上旬
温暖地	十月中旬	四月上旬～五月上旬
暖地	十月上・中旬	三月上旬～四月上旬

第二表　品種の特性

品種名	草丈	葉の大きさ	草姿	抽苔期	開花期	収量	その他
ハンブルグ一号	高	大	匍匐性	晩	極晩	多	
COOIO	極高	極大	直立性	晩	晩	極多	湿地には不適

第三表　栽培法

気候	適地	播種量（反当）	播種法	畦幅	反当施肥量	反当青刈収量
温暖で温度の激変の少いところがよい。	排水良好で肥沃な埴壌土または砂壌土に適する。	三合～四合	条	一・七尺～二・〇尺	堆肥 三〇〇貫 硫安 六貫 過石 六貫 硫加 一貫 （半分は追肥とする。）	七〇〇貫～一、〇〇〇貫
寡雪、厳寒で地表の凍結するところは不適。	新墾地にも良いが、酸性に弱い。					

芝草として有望な チューイングフェスク

チューイングフェスク (Festuca, rubra. Var follax.)

Chewing Fescue. は多年生牧草であつて草丈は一尺余、葉は細長く軟かで、光沢に富み頗る美しい草である。耐寒性に富み、冬でも青く、また暑さにも耐え、衰えを見せぬ。撒播しても株を形成せぬから、芝生を造るに最適である。

暖地無雪地帯の芝生として高麗芝が用いられ、あるいはケンタッキーブリューグラス等が用いられているが、これらは夏冬の候に枯れたり衰弱したりしてはなはだ美観を損う。しかも芝張りは容易ならぬ仕事で、費用も莫大であるが、チューイングは瘠地や乾燥地にもよく生育し、一年を通じ鮮緑色を呈し極めて丈夫な草であるから、